ＥＮＣＨＡＴＥＲ～誰かが視る明日の世界～

―奏音―

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＥＮＣＨＡＴＥＲ～誰かが視る明日の世界～

【Ｎコード】
Ｎ５００８Ｉ

【作者名】
―奏音―

【あらすじ】
記憶を無くした少女の記憶を知る手がかりは、敵となのる少年。でも、記憶を知るのには一筋縄ではいかなくて…？！現れるのは自称魔王に自称賢者に自称魔女！そして、真実を知る手がかりは七千年前と、五百年前に起きた悲劇！！その悲劇の中心人物は、誰よりも皆の側にいて、誰よりも皆から離れたがっていた人物…！！始まりと終わりの謎を解くファンタジーバトル、開幕！

プロローグ

二年前に世界を救ったのは独立騎士団サザンクロスの幹部だった

剣聖と呼ばれし、サザンクロス団長
セドリック・ペスパー

その娘であり、光の巫女と呼ばれる
リュシカ・ペスパー

セドリックの一番弟子である、闇の魔剣士
ロキ・フォークル

過去が一切不明、何かを隠し通す
イヴレスカ・アーヴィング

この四人は生ける伝説となった。

だが、セドリック・ペスパーとリュシカ・ペスパーは今はいない。

そして、世界のバランスは崩れ始め、
人の亡骸に宿る、人の悲しみと憎しみの塊である『グール』までもがまた現れ始める。

そして、独立騎士団サザンクロスから新たなる希望が現れる。
『希望』は自分のことや持っている力の事を何も知らないたった独りの少女だった……

ＥＮＣＨＡＴＥＲ～誰かが視る明日の世界～

「困ったな…。ここら辺の土地勘がないから迷子になっちゃった…」
深い、深い森を、肩までギリギリあるかないかの金髪をなびかせながら若草色の瞳の少女は歩く。
腰まである黒のヴェールを右髪を隠すようにつけ、淡い青緑色の肩が隠れない長袖の上着の下には黒のタンクトップ、緑色のロングスカートを着こなす少女の名前は、ユミナ・クリスティア
彼女は今、自分が記憶を無くしている状態で目覚めたときに持っていた二本の剣を使っている。
優しい赤色と、冷たい水色で、豪華な装飾が施された長剣。
あまりしっくり手にこない所や、使い方を見れば、これは彼女の物ではないのだろう。
だが、彼女はそれを使い続ける。自分を知る人が現れる可能性を信

じて……

「今日中に帰らないと怒られる……否、トウカやロキさんに私の秘蔵のお菓子が食べられる！！」
だからなんとしてでも帰らねば！！と言って回りを見るが、誰もいない。
「誰かー、誰かー居ませんかー？私遭難しちゃいましたー。そうなんですよー」
半分涙目で回りを徘徊し、人を探すが、やはり、誰もいない。
地面に座り込む。
最悪なパターンを頭が考えてしまい、頭をふってその考えを押し退ける。
その時、

ガサッ

背後からの物音。
人が来たのかと、勢いよく振り向く。

「――！？」

が、

そこにいたのは、闇のように黒く、様々な形や、動物の一部を持ち、中には人の形を取る、魔物ではないモノ
だが、異常ともとれる目映い金の瞳、それだけは共通して輝く。

「グール…、ここには出現情報がなかったのに…」
グールと呼ばれたモノはユミナを認識するとだんだんとその距離を短くする。
ユミナは慌てて距離を取ろうとするが、囲まれてしまい、距離は短くなるだけだった。
「あー、もー、面倒！！」
持っていた水色の剣を力任せに回転し、回りを凍らせた。
森にある木々も、回りを取り囲んでいたグールも、全てを

「やっぱり、この剣は凄いな…」

「だけど、その剣は君の命を奪う。」
「！？」
驚いた。
気配も無かったのに、凍っている背後の樹の枝に銀髪の少年がいた。
右目は空のような水色の瞳、左目は血のように紅い瞳、黒い上着に薄黄色のシャツに、黒いズボンに、灰色と黒のブーツ、右肩に赤い宝石のようなものが散りばめられているベルトを掛けている。そして、首元に光る月をモチーフにした女の子がつけそうなペンダントが似合ってなかった。

少年はジャンプして樹から降り、
「その剣と君が持つ力、それは俺の物だ。返してもらうよ」
「え……、じゃあ、あなた、私の事知ってる……？」
何かをすがるように、ユミナは少年に手を伸ばす。
が、その手はすぐに払い除けられ、
「そんなの、君は知らなくていい。ただ、その剣を返してくれればいいだけだ。」
「……、じゃあ、あなた、誰？」

「ただの罪人。ただの敵」
そう言ってユミナの腹を殴り、気絶させた。

少年は気絶したユミナの手から離れた二本の剣を持ち、ユミナの額と右腕に触れた。
「この力達は僕がユミナを守るために犯した罪の結晶。ユミナみたいな心が真っ白な人が使ってはいけない代物だ…」
そういって立ち去ろうとしたが、
「…待って。私はその力を使わないといけないの。」
ユミナが少年の足首を掴み、立ち上がる。
「私は…あの人達を探さないといけないの…！その為なら悪魔にだって魂を売ってやるわよ！！」
少年は剣をユミナの首筋に触れさせた。
「馬鹿だね。その後で待っているのは永遠の孤独と苦しみと罪だけだ。」
「それでも…やるしかないの！！」
ユミナは血が出ようとも剣を力強く握りしめた。
「それが私の選ぶ道な……ら……？」

ドクンッ

「…え……」

突然、頭の中に映像が流れ込む。その映像の中には何故か自分もいた。

「……しまっ……！」

『【　　】、うまくできてるな。』
剣をモチーフにした装飾を持っている誰かの手、
『じゃあ、ユミナと【　　】のを交換してみない？相棒同士の名前をモチーフにしたのってロマンチックだし。』
茶髪の女性がポンと手を叩いた。
『そういうものか？リュシカ』
『そういうもの！イヴだってお父さんの名前をモチーフにしたピアス持っているし。』
誰かはため息をつく、
『ユミナ、どうする？』
真っ正面にいた私は顔を真っ赤にして、
『…【　　】がいいっていうなら…私はいいよ。ね、団長もいいでしょ？』
『いいんじゃないのか、その方が絆も深まるし…』
『じゃあ、ユミナに渡す前に一工夫。』
装飾の裏に
「ユミナに贈る」
と彫った

「なんで…」
ユミナは少年に崩れ落ちそうな体を支えられて、意識を手放した。
「……予定が狂ったな…」

＊＊＊＊＊

「……ここは…？」
ユミナが目覚めた場所は見覚えのある部屋。
「倒れたんだよ、ユーちゃんは。それでここまで運んでくれた人がいてね。」
目が覚めたユミナを安心そうに見つめるのは、茶髪の、オレンジ色の瞳の少女。腕が隠れない黒の上着に、青のシャツに、青のフリルがついたミニスカートを着こなしていた。
「トウカ…その人って…」
「銀髪の結構かっこいい人だよ。ユーちゃんの好みのタイプみたいな人なの」
「その人…まだいる？」
「ロキさんがいうには入団希望者だって」
ユミナは一気に起き上がって、部屋を飛び出した。
「待って！まだ動いちゃダメ！！」
「ごめん！でも、無理！！」

「ロキさん！どういう…こと……？」
そこには傷だらけの男性と手当てをする女性と無傷のあの少年がいた。
「はい、終わり。」
「ありがとうな。それと、あとの説明は任せた。」
男性は少し納得いかないような表情でそう言い、部屋を出た。

「まったく…完全にムカついてるわ。」
女性は手のひらを強く握って、
「では、新団員のキリヤ・トスカレアくん。私は副団長代理のイヴレスカ・アーヴィング、独立騎士団サザンクロスについての説明をします。」

―その時の彼の表情は忘れられない―

―彼は悲しそうで、今にでも泣きそうな笑顔だった。―

―自分を責めるようなそんな顔が私は嫌だった…―、

第一話『3人の独白』

深い、深い祭壇のような暗い闇の中に、1人の少女と男性が居た。

「ありゃ～りゃあ～……」

「……」

少女は闇の中でも色が消えることのないオレンジ色の髪に左目が空色、右目がオレンジ色のオッドアイで、蝶をあしらったピアスに上品な色を漂わす白いワンピースを着こなしていた。

一方、男性は鳶色の癖毛の髪に深緑の瞳、だが左目を隠している。そして太股までを隠すほどの長さの碧の外套に、白いシャツ、黒いズボンを着こなしていた。（ちなみに現在煙草を吸いながら眼鏡を拭き中）

少女は軽く涙目になりながら、

「どうしよう～……。お菓子無くなっちゃった……」

「……は？」

眼鏡を装着し直し、男性の抜けた声。

「……いや、そこはプロローグの所ほじくりかえせよ。一応、第一話だぞ？一番大事なんだぞ？！」

「いや、だって『ＥＮＣＨＡＴＥＲ』はギャグを途中入れないと疲れるよ？死んだりとかで救われない人が圧倒的に多いし」

「……それを言うな。」

「第一話は『そういう話です』を説明するために存在するのよ？」

「こういう意味で使うものじゃねーよ。」

「じゃあ何に使うのよ。」

「これからの事件性を匂わす展開に使うんだよ！」

「面倒ね～。」

「……今すぐに小説書いている人に謝れ」
「却下」
「謝れ」
「却下」
「……頼むから謝れ。」
「却下。これからの事件性の展開は私達がやるとこんがるもの」
諦めたように男性は頭を掻き、二本目の煙草に火を着け、
「……まあ、そうなんだよな…」

＊＊＊＊＊
寂れた、人の気配が全く無い城、だがそこに軽やかな足音が聞こえる。
「へーいかー。へーいかー。器の居場所見つけましたよー。」
「ご苦労、シャーロット」1人は長い、剣のような輝きの銀髪に血のような紅の瞳、そしてエルフのような長い耳に月をあしらった、ピアスを着けた男性で、漆黒を切り取ったようなマントに黒の服を着こんだ、貴族のような高級さと上品さを漂わしていた。
そしてもう1人は茶髪に水色の瞳の少女、肌の露出が多い真っ黒のドレスのような服を着こなし、右腰にちょうどタロットカードが入るであろうホルダーを着けていた。
「で、どうします？私がいきましょうか？」
「いや、私が行く。今の『アレ』の状態なら私だけで十分だ。だか

ら」
留守は頼んだよ、そう言って少女の頭を撫でる。
「えへへー。じゃあ私お留守番してますね。」
「ああ、頼んだよ。」
「では……」
途端に少女の声のトーンが下がり、ドレスの裾を両手で軽く掴み、頭を下げる。

「いってらっしゃいませ。闇の王、ルシフェル様」

＊＊＊＊＊
たくさんのものが置かれた倉庫のような場所、そこの入口から一番奥にある、光輝く魔方陣の上に、頭を入れた全身を隠す白いローブを着こんだ人物がいた。
「……最悪だな」
声のトーンは低く、そこから男と判断出来る。そしてその男の視線の先には銀髪の少年、――キリヤと金髪の少女、――ユミナの姿が写る鏡がある。
「兄様ー？どこですかー？兄様ー？」
外からの軽やかな足音と明るい少女の声。それに気づいた男は鏡に手を触れ、鏡はただ男を写すだけになる。

「兄様？ここですか？」
扉が開かれ、薄茶色の髪に翡翠の瞳の、恐らく寝間着であろう桜色の長袖のワンピースを来た少女が現れた。少女は男が居るのに気づき、
「やっと見つけました。兄様」
「どうした？紗蘭（シャラン）？」
紗蘭と呼ばれた少女は男に向かって軽く早歩きになって男に抱きつく。体は少し震え、男はそれに気づき、抱き返す。
「……どんな夢を視た？」
「……人が、死ぬ夢……その人は愛している人に剣で斬られて……その場に居た人達のほとんどがその人の名前を呼んで……その人は斬った人に何かを言おうとして……身体が欠片になって、消えてしまったの……」
「……そうか」
「昨日も一昨日もこんな夢を視て……。視るんならもっと楽しい夢が視たいよ……。」

「紗蘭……」
男はフードを取り、紗蘭の頭を撫でる。
男は赤茶けた髪に琥珀の瞳をした、まだ二十には届いていないような顔つきの青年だった。だが、紗蘭とは全く似ておらず、唯一同じ所といえば青年のピアスと紗蘭の腕輪に刻まれた刻印だけだった。
「じゃあ、努力しよう？未来を変える事は難しいけど、努力して、足掻こう？俺達にはそれしかできないから」
「……うん」
「多分、来年位の話になると思う。だから、それまで「努力して、足掻き続ける。」」

第一話『3人の独白』（後書き）

「じゃあ、取り敢えず、紗蘭？」
「はい？」
「ベッドで寝てるっていう約束破ったお仕置きからな？」
「えぇぇ？！」

……な会話を望みます。
いえ、ちゃんと健全ですよ？大丈夫ですよ？作者はむっつりスケベですけど！↑

えっと、次回はやっとこさ主人公でます。第一話に出られなかった主人公、皆さんよろしくお願いしますm（__）m

第二話『任務』（前書き）

今回はユミナより、キリヤ寄りになります。

第二話『任務』

キリヤが入団してから今日で一週間、

ユミナはただ、ひたすら森を歩いていた。

（なんでこんなことに…）

ちなみに後ろにはキリヤが二、三歩下がった位置で歩いていた。

ことの始まりは一時間前、サザンクロス本部での話

「ユミナ、キリヤとこの任務についてちょうだい。ロキからの頼みよ。」

内容は、

『グールの討伐。』

簡単だと思った。が、

「あいつと一緒は嫌です。」

「いいじゃない。いいデビュー戦になるわよ。それに」

イヴがユミナに近づき、

「うちは元々二人一組が常識なの。今までは相棒がいなかったからよかったけど、もうダメ！反論は許しません！！」

そう言われ、完全に押しきられて、半ば強引に追い出された。

キリヤに剣をとられ、ユミナは現在、弓を扱っている。

「あのさ…」

「なんですか？」

「あんたはなんで私を襲ったのに、入団したの？」

「…クレスがこの剣から離れるとかなり面倒くさいことになるから。」

キリヤはユミナのファミリーネームからもじったクレスというあだ名を使っている。普通に名前で呼べばいいのに、と思っているがユミナもユミナであだ名すら呼んでいないから口に出して言うことは無かった。

「じゃあ、剣を返して。」

「却下。」

「あっそう…」

あまり一緒に話続けると殴りそうになるので早歩きをしてキリヤを置いていった。

「この剣には僕がサザンクロスにいたときのみんなの記憶が入っているんだよ。……ユミナ

今度はちゃんと、僕が守ってみせるから…」

＊＊＊＊＊
「さて、さっさと終わらせますか。」
書類にはこの森の中心にある唯一光が大量に漏れる所にグールはいるらしい。光を嫌うグールにしては珍しい……否、異常だ。
「足引っ張らないでね。」
「クレスみたいな足手まといにはならないから大丈夫。」
「……私、一応『最強』って呼ばれているんですが？」
「俺の師匠の方が何倍も、何十倍も強い。」
「じゃあなんであんたの師匠はサザンクロスにいないの？」
キリヤが足を進めるのをやめ、ユミナを見つめた。
「俺の師匠はセドリック、セドリック・ペスパー。クレスと同じ…ね」
「は……？私と、同じ……？なんで、そんなこと……」
「俺は、騎士だから。あの時誓ったクレスの騎士だから。……血に染まっているけど」

「そう、血に染まった哀れな存在。Ｈｅｌｌｏ，ユミナ、キリヤ」
「「――――！？」」

「ユミナ！！」
「く〝っ……！は、放し……っ」
突如ユミナの背後から現れたルシフェルはユミナの首を二の腕で抱き抱えるようにし、体を背伸びする位に浮かせた。
「せっかくの感動の再会なのに、冷たいな、キリヤは」「お前になんか会いたくなかった。早く、ユミナを放せ。そうしないと、……今度こそ消滅させる。」
「出来るものなら。今のお前になら私は負ける訳がない。それに、こっちには人質もいるしな」
ルシフェルがユミナの首元から横に触れるような位置に血のような、

赤く、黒い剣をどこからか出し、軽い呼吸困難に陥るユミナにそれを見せるようにした。
「ユミナ！！頼む、ルシフェル、ユミナを放してくれ！！」
「放すわけがないだろう？お前の弱点を」
キリヤの手が剣に向かったが、人質となったユミナの首筋に剣が進みそうになり、止められた。
「ユミナは必ず守らないとな。誓ったのだろう？私がお前達の大切な、大切な両親を殺したときに」
「……黙れよ。」
「そんな台詞を叩けるような身分か？」
ユミナの苦しむ顔を見せつけるような位置に体を浮かせ、力を更に込める。
「ふっ……ぐぅっ……」

「ユミナ！！」
キリヤの悲痛な叫びが森に響く。
「（誰でもいい、誰かユミナを……！僕じゃ救えないから……！！リー師匠、リュシカさん、飛鳥、父さん、母さん、ユミナを、……助けて……！！）」

――シャーン

『その願い、叶えてやるよ。』

鈴のぶつかる音と共に、声が響いた。「飛鳥……？」
知っている声が辺りに響く。
ルシフェルも、顔を青くし周りを見渡し声の主を探そうとするが、無駄な行動だった。『彼』はこの世界に存在しない存在だから

『対価を。願いを叶える代償を』

「二年間貯めていた僕の孤独と時間を！！」

『……分かった。叶えよう、その願い』

「……なっ？！」

声が響かなくなった途端に突如現れる白い固形状となった液体。ルシフェルが放さないユミナに向かって一気に動き出す！

「このっ……？！ぐっ……！！」

ルシフェルが液体を払おうとするが、触れるだけでルシフェルの服や肌はまるで酸に触れたように焼ける。

「光の魔術だから、闇そのものであるルシフェルと拒絶反応を起こす……。ユミナには、一切怪我を負うことはない…」

痛みによりルシフェルはユミナを放し、液体がユミナを包む。

『ユミナはしばらく俺が預かる。キリヤ、見世に対価を払いにこいよ。』

「分かってる……。だけど、ありがとう。助けてくれて」

安心したような年相応のキリヤの笑顔、声はそれを見たのか、照れくさそうに

『願ったのは、お前のくせに……』

そう言い、液体とともに消えていく。

「素直じゃないんだよなぁ……。あの陰険シスコンは。」

第二話『任務』（後書き）

次回、陰険シスコンご登場なさいます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5008i/

ＥＮＣＨＡＴＥＲ～誰かが視る明日の世界～

2010年12月25日18時09分発行